厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（分担）研究報告書

患者診療体験調査における質問表現の回答への影響に関する比較調査

研究分担者　渡邊　ともね　国立がん研究センターがん対策情報センターがん臨床情報部　研究員

研究要旨：本研究は、平成 30 年度患者体験調査において尺度スケールを使用した質問のうち、平成 27 年度の調査と比較してポジティブな回答選択肢を増やしたこと、及び、「がんになったことで、家族/家族以外に負担(迷惑)をかけていると思うか」の問いにおいて「（迷惑）」の文言が入ることによる回答への影響を検討することを目的とする。インターネット調査を通したランダム化比較試験を行い、対象者を平成 27 年度の回答選択肢、平成 30 年度の回答選択肢、および「迷惑」の文言の有無の４群に割り付け回答を得た。調査依頼した対象者数は 1635 人、実際に回答に参加した有効回答の対象者数は 737 人、回答率（有効回答数/依頼数）は 45.1%であった。結果の解析により、「迷惑」の文言の追加は、回答に影響を及ぼさないこと、また、肯定的な回答選択肢を増やすと肯定的な回答が多くなることが明らかとなった。このことから、回答選択肢の異なる二か年を単純に比較することは適当ではなく、本研究を通して得られた回答割合の差を利用した比較補正係数を使用し比較を行うことが妥当と考えられた。

A. 研究目的

平成 30 年患者体験調査の調査票は、平成 27 年度から回答選択肢が改訂されている。改訂のポイントは、多くの問に対し、平成 27 年度の調査ではポジティブな回答が多かったため、ポジティブな回答の中での分布の変化を観察できるようにすることと、より回答者にとってわかりやすい質問紙とするためであった。しかし改訂のために回答分布が大きく変化することが懸念された。特に、スケールによる回答選択肢は肯定部分を以前の 2 段階から 3 段階としたため、肯定回答が増えた。また、「がんになったことで、家族/家族以外に負担(迷惑)をかけていると思うか」という問については、平成 30 年度に追加された「(迷惑)」という文言が、わかりやすい反面で、回答分布に影響を大きく変えてしまった可能性がある。本調査は、ランダムに割り付けた等質と考えられる集団間にそれぞれの質問紙の回答を割り付け、これらの回答分布の差を検証すること、また、差がある場合に可能な限り補正を行う係数を算出する目的で行われた。

B. 研究方法

本研究は、インターネット調査会社(（株）インテージ）モニターを対象としたネット調査ランンダム比較試験）により行われた。対象者は、調査会社に各種インターネット調査に協力することを希望し、各個人で登録をしたモニターである。それらの方々のうち、登録時の情報として「抗がん剤内服歴の有無」で内服歴有りを自己申告したものが対象となる。対象人数は予算的制約を考慮しつつ、有意水準を５%、検出力を 80%とし、効果量 10%を見込んで、回答数 40%と推定し、有効サンプル数が各グループに 294 名ずつが必要であると算出した。これを基準に約 1500 人に回答を依頼するのが妥当と考えられた。なお、調査票はすべて事前の契約に基づく回答者の自由意志で行われ、回答の有無による不利益を被らないことを明記した。対象者を以下の 2×2＝4 群にランダムに割り付け、患者体験調査の本人回答の質問紙への回答を依頼した。それぞれの群に、平成 30 年度の調査票を配布したが、平成 30 年度に尺度スケールを使用した問(問 20-1, 20-2, 20-3, 20-4, 20-5, 20-6, 20-7, 20-8, 20-9, 20-10, 20-11, 20-12, 20-13, 26, 30-1, 30-2, 35-1, 35-2, 35-3, 35-4, 35-5, 35-6, 35-7（巻末資料１））について、スケールが異なった調査票が配布された。また、問 35-1, 35-2 につ

いては、「迷惑」の文言の有無が異っていた。具体的には、「（迷惑」」文言の有無については、「迷惑」文言「有」群と「迷惑」文言「無」群とし、H27 年度の選択肢｛1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.どちらともいえない、4.ややそう思う、5.そう思う｝を選択肢群①とし、H30 年度の選択肢｛1.そう思わない、2.どちらともいえない、3.ややそう思う、4.ある程度そう思う、5.そう思う｝を選択肢群②とし、以下の４群に割り付けた。

	「迷惑」文言「無」	「迷惑」文言「有」
選択肢群①	グループ①-1	グループ①-2
選択肢群②	グループ②-1	グループ②-2

解析方法は、以下のグループごとの比較を行った。

文言の解析	グループ①-1×グループ①-2：家族への負担と家族以外への負担（解析①） グループ②-1×グループ②-2：家族への負担と家族以外への負担（解析②）
選択肢群の解析	グループ①×グループ②：選択肢群①の 4,5×選択肢②の 3,4,5（解析③） グループ①×グループ②：選択肢群①の 4,5×選択肢②の 4,5（解析④）

C. 研究結果

調査依頼した対象者数は 1635 人、実際に回答に参加した有効回答の対象者数は 737 人、回答率（有効回答数/依頼数）は 45.1%であった。

文言の解析

＜解析①＞

家族への負担においてグループ①-1（69%），グループ①-2（64%）（p=0.365）

家族以外への負担においてグループ①-1（43%），グループ①-2（38%）（p=0.441）

＜解析②＞

家族への負担においてグループ②-1（73%），グループ②-2（75%）（p=0.641）

家族以外への負担においてグループ②-1（50%），グループ②-2（48%）（p=0.682）

選択肢群の解析

＜解析③＞

すべての問いにおいて、選択肢②の回答がポジティブな回答の割合が高くなった。統計的検定の結果、回答の割合に有意差（p<0.05）のあるものは、14/25 問であった。

＜解析④＞

すべての問いにおいて、選択肢①の回答がポジティブな回答の割合が高くなった。統計的検定の結果、回答の割合に有意差（p<0.05）のあるものは、22/25 問であった。

D. 考察

「迷惑」の文言追加については、どの解析においても回答分布の差は認められなかった。よって、「迷惑」を追加したことによる回答への影響はないと考えた。

回答選択肢で肯定的な回答を２つから３つに増やすと、全体的にポジティブな回答が多くなる影響があったと考えられる。そのため、平成 27 年（前回）と平成 30 年（今回）調査の回答の肯定割合はそのままでは同列に扱うのは適切とは言えないことが判明した。一方で、平成 30 年以降で変化をみるという視点からは、肯定選択肢の３つのうち、２つを主たる指標として扱うのが適切である。

以上の結果から、両年の比較を検討するときには、両選択肢群の肯定回答の割合の違いから、下記のように比較係数を算出して前回との比較に使用した。

「比較補正係数＝平成 27 年度調査形式の上位２つの回答割合/平成 30 年度調査形式の上位 3 つの回答割合」

尺度スケールを使用した問いにおいて、本調査を通して得られた回答割合に基づく比較補正係数を使用し比較を行っている。なお、今回対象となった問の中では、平成 30 年調査は基本的に「程度」の強さ（とてもそう思う、ある程度そう思うなど）を問うているのに対し、平成 27 年度の調査では「頻度」（よくある、たまにあるなど）を問うものが混在しており、その場合、比較係数を使用しての年度間比較も可能ではないと考えられた。

E. 結論

本研究より、「迷惑」の文言の追加は、回答に影響を及ぼさないこと、また、肯定的な回答選択肢を増やすと肯定的な回答が多くなることが分かった。２つの調査を比較する際には、これらの影響を加味した比較係数を使用することで、比較検討を行う。

G．研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）
1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3.その他
なし

巻末資料 1
問 15-1　「がん治療」を決めるまでの間に、医療スタッフから治療に関する十分な情報を得ることができた
問 15- 2　がんの診断から治療開始までの状況を総合的に振り返って、納得いく治療を選択することができた
問 20－1　治療スケジュールの見通しに関する情報を十分得ることができた
問 20－2　治療による副作用の予測などに関して見通しを持てた
問 20－3　がん治療を進める上で、医療スタッフと十分な対話ができた
問 20－ 4　医療スタッフは、あなた（患者さん）の言葉に耳を傾け、理解しようとしてくれていた
問 20－5　治療におけるあなた（患者さん）の希望は尊重された
問 20－6　つらい症状にはすみやかに対応してくれた
問 20－7　あなた（患者さん）のことに関して治療に関係する医療スタッフ間で十分に情報が共有されていた
問 20－8　あなた（患者さん）のがんに関して専門的な医療を受けられた
問 20－9　主治医以外にも相談しやすい医療スタッフがいた
問 20－10　これまで受けた治療に納得している
問 20－11　最初の治療を受けて退院するまでに、生活上の留意点について（食事や注意すべき症状など）
問 20－12　紹介先の医療機関を支障なく受診できた（がん治療が始まってから今までの間に転院したことがある人のみ回答）
問 20－13　希望通りの医療機関に転院することができた（がん治療が始まってから今までの間に転院したことがある人のみ回答）
問 26　がんの治療中に、職場や仕事上の関係者から治療と仕事を両方続けられるような勤務上の配慮があった
問 30－1　一般の人がうけられるがん医療は数年前と比べて進歩した
問 30－2　がん患者の家族の悩みや負担を相談できる支援・サービス・場所が十分ある
問 35－1　がんになったことで、家族に負担（迷惑）をかけていると感じる
問 35－2　がんになったことで、家族以外の周囲の人に負担（迷惑）をかけていると感じる
問 35－3　がんと診断されてから周囲に不必要に気を遣われていると感じる
問 35－4　（家族以外の）周囲の人からがんに対する偏見を感じる
問 35－5　身体的なつらさがある時に、すぐに医療スタッフに相談できる
問 35－6　心のつらさがある時に、すぐに医療スタッフに相談できる
問 35－7　現在自分らしい日常生活を送れていると感じる